

「風葉和歌集」の詞書(二)

詞書の役割

はじめに

前号の拙稿^(前)では、「風葉和歌集」(以下「風葉集」と略す)春上^上部から哀傷部までの詞書について考察し、配列をその中心に据えて詠歌時の物語本文や「物語二百番歌合」の詞書との比較を試みてみた。今回はその後編として、賀部から恋^恋部、雑^雑部、雑^雑部までを順を追って分析して行きたい。(前号と同様、その差異の認められる箇所については~~~~を付す)

一、

米田明美

「風葉集」詞書

〈賀部〉

詞いぬのみやのうぶやしなひに、
こがねのきじにかきてつかは
しける(「うつほ物語」盛開)

詞おなじうぶやによみ侍りける

(「同」祭の使)

資料

物語では、正頼邸での納涼会の際詠まれたもので、前歌とは全く関係ない場である。

賀部は前半(初〜Ⅶ)までは季を追って配される四季賀であり、後半(Ⅷ〜Ⅸ)は誕生賀・長寿；等の賀賀の小歌群としてまとまり並べられており、この部は特に「統古今集」賀部と構造的に似ている。Ⅷは、大宮誕生の折藤童女御が飾りつけた産養の品に添えられた手紙の中の歌であるが、Ⅸの歌はこの詞書の記述とは全く無関係の場面で、正頼邸での納涼会で詠じられたものである。配列はⅧからⅨまでの四首誕生賀を意味する小歌群となっており、誕生賀として束ねたものと考えられる。前歌Ⅸの詞書を受けて「おなじうぶやに：」と詞書を整えていることから、このⅨの位置に歌を並べてから配列を考慮し手直したと考えられよう。少なくとも物語から歌とともにその詠歌事情を要約し、抜き出したそのままの記述ではあるまい。女一の宮は正頼邸で犬宮を出産しており、Ⅸの詞書に例えば「正頼邸にて：」等記述されていたのを、同じ正頼邸であることから配列の後詞書を整えた際同じ場面の内容と錯誤したのかもしれない。どちらにしてもこのⅨの詞書は、「おなじ：」という表現からみて、物語本文での詠歌事情を記したそのものの叙述ではなく、配列の後整えられた詞書とみることができよう。

〈恋一部〉

Ⅷ女にはじめてつかはしける

〔源氏物語〕胡蝶

Ⅷ女のもとにつかはしける

〔うづは物語〕藤原の君

Ⅷ女をうちとけぬさまにてあかさせ給ひけるのち、こひしう

おほし出でられて、よるのころもをかへしわびさせ給よ

なよなよ、さすがにあやしう

おぼされければ〔狭衣物語〕

卷四)

Ⅷ女

のつれなく侍りけるにかか

るを見て、なかなかひたぶる

ころもつきぬべきとて

〔源氏物語〕夕霧

Ⅷ斎院に、雪にてふじの山つく

られて侍りけるを御らんじて

〔狭衣物語〕卷三)

17 頭中將ときこえし時、たまか

づらの内侍のかみに〔前・九

番左)

女』あて宮

Ⅷ中宮にきこえそめさせ給へり

しころ〔前・九十六番右)

女』朱雀院女二の宮〔落葉の

宮)

64 源七の宮の御かたにゆき山つ

くるを御らむじて〔前・三

十二番右)

80 おおすことをいささかもらさ
せ給ひつる女に(「同」卷一)

87 しろかねのひとりにくろぼう
をまろがして、けぶりなどし
て、女のもとにつかはしける
(「うつほ物語」藤原の君)

85 をこのはじめて、これやさ
はいりてはしげきみちならん
山口しるくまどはるるかな、
といへりけるかへりごとに
(「古とりかへばや」)

83 しのびたる女を、うちとけぬ
さまにてあかしてよめる
(「あたりさらぬ」)

86 おなじさまにてあかさせ給ひ
つる女のもとに、つかはさせ
給ひける(「狭衣物語」卷四)

恋の部は恋愛の進行に伴う配列がなされており、恋一部は恋の始まり、つまり相手に想いを抱き恋心を訴えるも届かぬ心情

84 斎院源氏の宮ときこえし時
(前・四十二番右)

女Iあて宮

86 権中納言はじめて、これやさ
はいりてはしげきみちならむ
やまみちしるくまどひぬるか
な、と侍りける返し(後・八
十四番右)

26 中宮にしのびておはしましそ
めてあしたに(前・十三番
右)

を、時間的経過に従い並べられている。70は恋一部巻頭歌で恋部全体の巻頭歌でもあり、「女にはじめて…」と始めて我思いを女に伝えた柏木の歌である。同歌の「物語二百番歌合」の詞書は、その相手の名玉鬘を示しているのに対し、「風葉集」の詞書は「女」である。この柏木の玉鬘への思いは二人が異母兄妹であることが知れるにつれ終結するのだが、この「風葉集」の詞書の記述ではいつ、だれに贈った歌なのか定かでない、物語場面に則した要約とは言えないであろう。

70は後の87と同様「女」はあて宮のことである。70は「狭衣物語」歌であるが、後の86とほぼ近似の場面である。物語の順序からすると、狭衣大将が有明け月の夜宰相中將の妹(式部卿宮の娘、後の中宮)を見初め、翌朝その面影を忘れることができず贈った歌が86で、その数日後詠じた歌が78である。両歌とも「物語二百番歌合」に採られているものの、相手の名は記され、しかも「中宮にきこえそめさせ給へりし」、「中宮にしのびて…あしたに」と物語場面の展開を丁寧に押さえている。また86の詞書の「おなじさま…」は、前歌85の詞書「しのびたる女をうちとけぬさまにて」を受けていると考えられ、重複をさけるため配列の後書き直した箇所と言えるであろう。この78 86が物語では近似の場面であり、しかも86 78の順に語られている

のに「風葉集」では十五首程隔った位置に並べられているのは歌語のためと思われる。78は前歌79の「かさねてなかの袖」(78歌中)を受け「かたしきにかさねのころも」(78歌中)とし、79「かたしきの袖」(79歌中)と展開している。それ故78詞書には「…よるのころもをかへし…」と「衣」を強調すべく語られている。一方83は、前々歌84の「やがてめるよの夢も結ばず」(83歌中)を受け、85「みしや夢」(85歌中)、次の「ねぬよの夢」(86歌中)と「夢」を導くため、86の詞書には「…あかさせ給ひつる…」と夜を明かす語が加えられている。

78の「女」は落葉の宮である。詞書ではその名は語られておらず、女の「つれなく侍りける」様子が強調されている。

85の「狭衣物語」歌も、物語では85が巻一、86が巻一の歌で、物語場面は逆になっている。85は前々歌83の歌中「世とともにつけふり絶えせぬふじのね」、84歌中「ふじのねのけふりときけば」を受けて、「もえわたるわが身ぞふじの山よただ」(85歌中)と富士山の煙に関連した歌が並べられていると考えられる。それ故85の詞書は「風葉集」では「…雪にてふじの山つくられて…」と、「物語二百番歌合」の同歌の詞書より「ふじの山」が強調されていると言えよう。86は狭衣大将が始めて自ら

の胸中を源氏宮に告白した折の歌であるが、「物語二百番歌合」の詞書では「斎院源氏の宮ときこえし時」と端的に相手の名を記しているのに対し、「風葉集」の詞書では「女」である。前歌85では示されている源氏宮(後の斎院)と同一人物であるのに、名が伏せられているのは、配列を考慮したためであろう。配列では「富士の山」(8385)が同じ煙の名所として名高い「室の八嶋の煙」を導き、その歌語の展開が優先された結果、物語では場面が逆になり、詞書でその名を明確することが出来なかったであろう。

85は散逸した「古とりかへばや」歌であるが、「物語二百番歌合」と詞書の記述はほぼ同一である。相違しているのは、「風葉集」が「をとこ」と名を明さないのに対し、「物語二百番歌合」では「権中納言」と名を示している箇所だけである。

〈恋二部〉

81をとこの返事につかはしける

(みかにはさける)

須頭中持たのめわたりつつまで
こざりければ(後・二十七番
右)

82をとこのためたるよのふけ

男中持

侍りければ、「あさちが露」

861 いとしのびたる女のもとにて、
いみじうあかぬけしきにうち
ながめて、「有明けの別」

883 女のもとよりいでけるあかつ
きよめる、「みかにはさける」

889 しるびて御らんぜられける女
に、あかつきの給はせける
、「露のやとり」

895 あかずおぼされける女を、あ
かつきいざなひていでさせ給
ひて、まだかやうなることを
ならはざりつるを、心づくし
にもありけるかなとのたまは
せて、「源氏物語」夕顔

916 女のもとよりかへりてつかは
しける、「みかにはさける」

928 女のもとよりかへりて、あし

女Ⅱ今北の方の連れ子の姫君

288 しるびていづるあか月春富の
せんじに（後・四十四番右）

384 ふるさとの内侍のかみを、心
よりほかに御らむじそめてた
ちわかれさせ給ふとて（後・
九十二番右）

21 ゆふがほの君いざなひいで、
ながしの院へおはせしあか
月（前・十一番左）

290 かへりてあしたに春宮のせん
じに（後・四十五番右）

女Ⅱ中務卿北の方

たにつかはしける、「有明け
の別」

930 あしたにおともせざりけるを
とこのもとにつかはしける
、「あさちが露」

932 ただ一たびあひて侍りける女
に、「みかにはさける」

男Ⅱ尾張の守

272 承香殿女御ももそのにわたり
て物いみし給ふ所に、おもは
ぬほかにその人ともしらすゆ
めの心ちしてたらいでてあし
たに（後・三十六番右）

恋二部は相手のつれなさを恨みつつ、その忍びたる相手に逢
えた宵・暁・鶴の声・有明け月・後朝と時間的推移を示し、巻
末には「逢坂の関」を含む歌を置き、二人の恋が成就したこと
を示すという配列がなされている。この部についても、恋一部
同様相手の名を記さず「男」「女」という人称名詞で表した詞
書が多い。「みかにはさける」は散逸物語であるが、「後百番歌
合」に十五首採られており、大凡の輪郭が理解される。しかし
この恋二部での四首（881 883 916 922）はいずれも「男」「女」で記
されており、この詞書ではその内容は知り得ない。「後百番歌

合」の詞書で相手の名を知るのみである。88の「露のやどり」も散逸物語であるが、「風葉集」の詞書ではある女との暁の別れが語られているだけである。「有明けの別」(88)、⁸⁹「あさちが露」(89)の詞書も同様相手の名は記されていない。特に89の「あさちが露」歌は、兵部大夫「風葉集」の詠者名は兵衛督の娘と中納言との「風流滑稽譚」で、「あさちが露」のストーリーと直接関係のない挿話である。だがこの「風葉集」の詞書をそのまま読むと、「あさちが露」には兵衛督の娘とある「男」の恋愛物語が語られていたような錯覚を与える。「あさちが露」物語全体の内容を視野に入れての記述とは言えず、「風葉集」の配列に従っての記述と言えよう。

88は光源氏が二人だけで心ゆくまで語らいたく思い、夕顔をなにかしの院へ連れ出した折の有名な歌である。この前後の配列は、88から六首「有明けの月」が詠み込まれ、次の88は「暁のかかる別れ」、88では「暁の別れ」の語が見い出され、有明月のもと暁の別れとして歌が並べられていると考えられる。ところがこの「夕顔」の巻の場面は、いさよう月に誘われ源氏が夕顔を車に乗せ、なにかしの院に到着し院の留守役を呼び出している間、牛車の中で光源氏が詠んだ歌であり決して暁の別れの場面ではない。「風葉集」の詞書では「暁いさなひ出でさせ

給ひて」とのみ語られ、暁の別れのような錯覚を覚えてしまうと思われる。この点「物語二百番歌合」では、「なにかしの院へおはせしあか月」と端的かつ正確に要約していると言える。88の詞書は偽りを述べているのではないが、配列の展開上意図的に「なにかしの院におはしまし着きて」を詞書に連ねなかつたと考えられるのではないだろうか。

〈恋三部〉

97月ころありてまうできたるを
とこの、ちちのやしろをひき
かけて、ゆくさき長きことを
契り侍りければ「源氏物語」
総角)

93つれなくのみみえ奉りける女
のもとにちかづきよらせ給ひ
つるに、御こたへも聞えざり
ければ、大かたの世をもかざり
りにおぼしめしとちめさせ給
ひて、あしたにつかはさせ給
ひける。(「狭衣物語」卷三)

をとこ』句宮

88女二宮に(前・四十四右)

恋三部は四十首程度の大脱落が存し、それ故配列も判然としないが、大筋としては二人の仲が疎遠になり始め、間遠くなり、巻末には家を出る女君の姿が浮かぶよう歌が並べられている。

94は宇治の中の君の歌で、二カ月ぶりに匂宮が中の君のもとを訪れた場面であるが、匂宮の名は伏せられている。93は、女二の宮に文を遣わそうとする狭衣大将の歌の詞書である。この前後の配列は、前歌92の詞書には、「いとつらかりける女につかはしける」、次歌93の詞書が「のちのあふせをため侍りける女の、ほかさまに成りにける夜つかはしける」と相手がつれなくなつたことを叙述している。そのためか女二宮を他の詞書より「つれなくのみみえ奉りける女」と強調されていると言えよう。

〈恋四部〉

983よづかぬ御身のありさまみあらはされ給へりける人の御かへりごとに（「とりかへばや」
卷二）

990しのびたる男のいといたくうらみ聞えければ（「我が身にたどる姫君」卷三）

人Ⅱ宰相中将

男Ⅱ中納言

996女のゆくへしらでなげきはべりけるころ（「朝倉」）

1007御心ざしありての給はせける女の、あらぬさまになりければ（「いはでしのぶ」卷五）

1021もの申しける女のもとに、こゝと人のまかりかよふと聞きてつかはしける（「源氏物語」浮舟）

1027山ざとに人をしりおきてかよひけるに、たびかさなりければ、とのゐのものなどおきてまもらすことになりて、えあはでかへり侍るとて（「源氏物語」浮舟）

1038あひがたかりける女のあたりなる人にいひ侍りける（「海人の刈藻」）

320あさくららのゆくへなさをつきせずおぼしなげきころ（後・六十番右）

あらぬさまⅡ他の男と結婚したことが。

65兵部卿の宮宇治におはしかよふとききて、うきふねの君に（前・三十三番左）

人Ⅱ浮舟

398ふじつばの中將のきみに（後・九十九番右）

1047 あはれと思ひける女の、あはづのはまのほとりにて身をなげにけりと聞きて、石山にまうで侍りけるに、うちいでほどすぐとてよみはべりける
（朝介）

引權中納言ときこえし時、あさくらの君あふみのうみに身をなげてけりと人づてにききたまひけるころ、いしやまにまうで給ふとて（後・五十七番右）

恋四部は相手の心変わりを嘆き、かつての夢のような逢瀬を思い、巻末には入水する女君の姿を並べており、恋一部からの恋物語の終結が語られている。この部も「人」「男」「女」と相手の名を伏せようとする詞書が多い。その中で1007は「いはでし^{のぶ}」の散逸部分に属する詞書であるが、この1007歌は抜き書き本と称される三条西家本に存している。それによると、思う女性が他の男性と結婚したことを聞き、嘆かれた嵯峨院が詠じた歌と推定される。^{（作註）}しかしこの前歌1006の詞書が「いとせちに思ひける女にただしほしそひて侍りけるが、ゆくへしらずなりにければ」と記され、歌中に「面影にこそわすれわびぬれ」と詠まれ、次1008の詞書が「つれなくてみえ奉りける女の、いのちの後をたのめてもみむと聞えけるをおぼし出でてよませ給ひけ

る」とし歌中「ちぎりし後の世をたのみつつ」と嘆いており、想う人が行方不明になった、或いは来世の約束等の歌の間にある故、この1007の「あらぬさま」という表現は亡くなった、または出家したと解されかねない。この「あらぬさま」という曖昧な記述は、配列の展開を優先させたためではないだろうか。

この恋四部では、はかなげな女性の代表とされる浮舟、散逸物語であるが琵琶湖に身を投げた朝倉君は「女」と称されているものの、「狭衣物語」の飛鳥井の姫君に関しては巻末二首名が明記されている。しかも他の詞書と比べ長文であり、「物語二百番歌合」の詞書よりも残された男君（狭衣大将）の悔恨の思いに言葉が尽くされ、その嘆きに重きが置かれていると言える。

1049 ただ人におはしましけるととき、こかはにまうでさせ給ふに、よし野のあたりにて、あすかるのことおもほし出でられて、かばかりのふかさをだに思ひいりがたげなるに、いかばかりおもひてかなとおぼしめされて（狭衣物語）卷二

100 高野にまゐらせ給ふとて（前・五十番右）

1060 あすかゝるものかきて侍りけるあふぎを御らんずるに、なみだのあとといとしるく、まどもあらはれおちたるを、またながしそへさせ給ふとて
〔狭衣物語〕卷二

この歌が恋四部卷末に位置し、他の詞書と比べて長く、しかも他の詞書では相手の名が伏せられている傾向の恋部中において、「あすかゝ」と明らかにしている点、強い印象を読み手に与えるのではないだろうか。

〈恋五部〉

1061 弘微殿のはそどのにたちより給へるに、おほろ月夜になるものぞなきとうちながめける女を、ふととらへさせ給ひて
〔源氏物語〕花宴

1061 女のもとにつかはしける
〔うつほ物語〕春日詣

180 あすかゝるのかたみのあふぎを御らむじて (前・九十番右)

3 弘微殿の三のくちにておほろ月夜のないしのかみに (前・二番左)

女 〓あて宮

1074 五月五日、女のもとにつかはさせ給ひける〔狭衣物語〕卷二

1085 女のもとに、うつせみの身にかきつけてつかはしける
〔うつほ物語〕祭の使

1087 あるまじきことを思ひけるに、その女のもとに、なごしの月のわびしきはいむてふことのないにぞ有りけると人のいひおこせたるをみて、かたはらにかきつけはべりける (うつほ物語) 祭の使

1088 秋のはじめつかた、をこのかへりけるあしたに (いはいでしのぶ) 卷三

1127 志賀にまうでて、紅葉の露にぬれたるををりて、女につかはしける (うつほ物語) 蝶

40 二の中將ときこえし時一品宮に (前・二十番右)

女 〓あて宮

女 〓あて宮

男 〓一条院の内大臣

女 〓あて宮

114をこのよぶかく出でにける

あかつきをながめて侍りける
女のもとにたちよりたるを、
もとの人と思ひて、いかでか
くたちかへるらんよをこめて
あかしもはてずいづるみちよ
り、と申し侍りければ、「み
かはにさける」

115雪のふりける夜、こころにも
あらずまからず成りにける女
のもとに、あしたにつかはし
ける、「源氏物語」真木柱

恋五部は恋一―四部とは異なり、四季の恋の歌を収めている。
勅撰集では四季の自然・行事などに寄せる恋の歌は各集の恋部
に点在しており、「風葉集」の場合それを一つの巻に集めたわ
けで、それだけ恋一―四部では恋愛の進行を示す時間的経過を
表した配列が明確に鑑賞でき、かつ恋五部は四季の移り変わりを
味わうことができると言えよう。この四季の変遷についても、

116あか月いづる頭中将にிரりか
はりて、ありつる人とおもは
せて承香殿中納言君に（後・
四十番右）

117内侍のかみにかよひそめての
ころ、心ならずよがれしてあ
したに（後・四十番左）

正月一日から五月五日・七夕・紅葉・五節・氷・雪…等自然と
行事を詠み込んだ歌をその季に従い配している。

この部でもやはり相手の名は伏せようとし、逆に季節を示す
語は書き加えようとする方向がみられる。117の「狭衣物語」歌
の詞書は、「物語二百番歌合」の詞書で語られている一品の宮
は「女」として記されているにもかかわらず、暦日「五月五
日」は丁寧に示されている。同様に115の「源氏物語」歌の詞書
でも内侍のかみ（玉篋）の名は「女」とされているものの、
「雪のふりける夜」と巻末の「雪」の配列を表す詞は語られて
いる。「物語二百番歌合」と比較はできないものの、他の詞書
も相手の名は示そうとはしないものの、「…うつせみの身にか
きつけて…」（108）、「…なごしの月の…」（107）、「秋のはじめつ
かた…」（108）、「…紅葉の露にぬれたるを…」（117）と配列上の
位置を意味する語は簡単ではあるが記されている。

へ雑一部

118ひさしうせうそこもし侍らぬ
をとこにをさなき子など有
りければ、なでしこの花をを
りてやるとて、「源氏物語」帯

男―頭中将
幼なき子―玉篋

木)

1203 人を行へしらすなしてなげき
侍りけるころ、を花の風にな
ひくを見て(浜松中納言物
語」巻五)

人吉野姫

雑部は「風葉集」においては、この集の最後に位置している。
元来雑部は、四季・賀・哀傷・離別・羈旅・恋部などの部に含
まれない歌が集められていると言われる。この1188 1203は相手の名
を「男」「人」とし、明らかにしていない。しかし四季を示す
「なでしこ」「尾花」は記されているのである。

〈雑二部〉

1260 二位中将にはべりける比、ふ
ちつばに立ちよりて、女房に
物がたりけるに、月くまなく
さしいでてぬるがほなれば
(あさちが露)

1261 にはふ丘部卿のみこ、むすめ

1262 六君に兵部卿の宮かよひそめ

(本文) 西に傾く月くま
なくさし入りて、御直衣にう
つれるも、げにぬる顔なる
や。(歌)

にたのめて侍りけるに、十六
日の月やうやうさしあがるま
で、ころもとなく侍りけれ
ばつかはしける(源氏物語」
宿木)

1266 世をいとはしくおほしめしけ
る比、入かたの月のくまなく
さし入りたるを御らんじて
(狭衣物語」巻三)

1270 世になきさまに開えてのち、
右大将北山にこもれりとつた
へききて、月のあかりける
夜、ながむらんおもかげもみ
るこちして思ひやられけれ
ば(夜の寝覚」中間欠巻部)

1274 うき舟の君ぐして、うちま
かれりけるに、舟の尾、むか
しおばえてすめる月かなとい
ひて侍りければ(源氏物語」
東屋)

させ給ひけるよ、ふけゆくま
でおはしまさざりければ(後
・九十番左)

150 さがの院にて入道の宮の御か
たにて(前・七十五番右)

216 右大将三ゐの中將ときこえし、
きたやまにこもりぬとつた
へききて(後・八番右)

217 うきふねの君宇治にわたして
のち(後・八十七番左)

雑二部は無季の歌群で、素材毎に東わられ配されている。最

初に置かれているのは「月」三十九首で、この部の半数に及ぶ。以下「雲」「雨」「風」「露」「楽の音」と並べられている。「月」の歌群も、暮を待ち「出る月」から「月の光」、「山の端めぐる月」から「山入る月」とその時間的経過を表現していると思われる。

1260の「あさちか露」歌は「出る月」として置かれていると考えられ、詞書にも「月くまなくさしいでて……」と記されている。ところが物語本文では「月も入方になりぬれば、上も中宮も還り渡らせ給ひければ……」と語られ更に「……西に傾く月もくまなくさし入りて、御直衣にうつれるも、げにぬるる顔なれや。」とし、1260の歌が詠じられている。物語本文に「西に傾く」と述べられ、しかも私宴が果てた後の歌であり読み誤った、或いは伝本異同とは考え難い。撰集過程で歌を抜き、詞書を要約して付した後、歌を並べるまでの作業の間に何らかの写し誤りなどが生じたのか、或いは作爲的に歌語の連続「前歌1260」とこの1260歌は「雲居の月」が共通している一等から、「月くまなくさし入りて」を「月くまなくさしいでて」に書き改めたとも考えられよう。

1261 1266 1270 1274は、「物語二百番歌合」の詞書と比べると、「風葉集」の詞書の方が配列上の位置、つまり「月」の歌群中である

ことを示す記述がみられる。

〈雑三部〉

1381 しがにまうでて、つれなき女
のもとにつかはしける（「う
つは物語」藤原の君）

女―あて宮

1389 右のおほいまうち君、一条の
家にはすませながらかれはて
にければつかはしける（「う
つは物語」藤原）

1391 おなじさまにはべりけるころ、
右大将なかたたちよりて、
せうとのなかより水のをにこ
もれることを申しいでて、む
つまじきうときといもをふり
すてて山べにひとりいかです
むらん、と申しければ（「う
つは物語」藤原）

男―実忠

1391 をとこの心がはり侍りければ、
山ざとにうつろひすみけるを、

そこもしらで物まうでのか
へるさにたちいりたりけるを、
ほのかにみて（「うつほ物語」
菊の宴）

雑三部は「旅」をテーマとして、各素材ごとに並べられていると考えられる。ここに引用した四首はその配列とのかかわりを指摘するものではないが、1381 1391は相手を人称名詞で表している。1390は、前歌1389と同じ、「うつほ物語」歌ではあるものの、近似的場面ではなく巻は異なっており、撰集過程において歌を並べた際たまたま1389 1390の詞書の意が重なることが生じたので、「おなじさまに」と詞書を直し、重複をさけたと思われる。これは配列を鑑賞する上で詞書を整理したことを意味し、歌を配した後詞書に手を入れたことにはほかならない。このような箇所は先に752・836でも指摘したが、他に323・344・426・494・524・534・600と幾つか見受けられる。

まとめ

以上前号の「『風葉和歌集』の詞書（一）詞書の役割」と合

わせ、春上部から雑三部まで物語本文や「物語二百番歌合」の詞書と比較し、「風葉集」の詞書の性格・役割を考究してみた。その結果「風葉集」の詞書は、単に物語場面を要約し詠歌事情を説明するという意図だけではないと思われる。物語本文から詞書をなす際、どの語を削除し、どの語を添えどうまとめるかということであるが、その折配列を説明する方向で作為的に本文を要約したと考えられる詞書が多々見られるのである。「物語二百番歌合」は相手の名を丁寧に記そうとしているが、「風葉集」ではあえて「男・女・人」とし名を伏せようとする詞書が多く、特に恋部では顕著である。また逆に四季の配列ではその季を表す素材を詞書に連ねようとしている。今回明らかに出米たのは現存物語や資料の存する散逸物語に限られており、散逸した多くの物語まで考慮するとその性格はもっと明白になるであろう。

「風葉集」の詞書は、各部の配列を重複し「歌集」としての視野に立ち記述されていると言える。その部において置かれた歌の位置の説明、配列の鑑賞を指示するものと言えよう。これらのことは「風葉集」の撰集過程を考える上で大きな意味を持つと思われる。「風葉集」の詞書は、物語から各歌を抜き出しその歌の詠歌事情をまとめた詞書そのものではなく、その後配

別に従い歌を並べた際手を入れ整えられたと考えられるからである。少なくとも最初から名を伏せて物語から抜き出したとは考え難いし、四季の素材に注目して詞書を要約したとは考えられない。やはり物語から抜き出し、「風葉集」各部の配列に則り並べて後、その配列を説明する方向で整えられ現在の詞書となったのではないだろうか。

また今回触れなかったが、「風葉集」には勅撰集の形式を踏襲していると考えられる詞書（神祇・釈教各部冒頭の神祇卅一箇、仏詠卅一箇歌群）や、「題しらず」など歌集を意識した詞書も存する。これらのことを合わせ考えると、「風葉集」の詞書は、各歌の物語での詠歌事情を説明するためだけに付されたものではなく、「歌集」や「勅撰集」としての視野に立ち添えられたものと言うことができよう。前号でも述べたが、「風葉集」の詞書はたとえ物語本文と多少異なる内容が叙述されていても、読者は物語ではなく詞書に示された解釈を読み進めるべきなのである。物語での相手の名や事の経緯などが伏せられている詞書は、物語場面にまで遡って考える必要はないのである。そしてこの詞書の成立を「風葉集」撰集過程と重ねて考究すると、恐らく何度も何度も「歌集」や「勅撰集」にすべく手を加えられたと考えられ、かなりの歳月が費やされたと推定でき

よう。撰集過程についての詳しい考察は別稿^(註五)に譲りたいが、ここでは特に「風葉集」の詞書は、物語中での詠歌事情を単に要約したのではなく、「歌集」として配列を説明する方向で記述されていること、あくまで各部の各配列が紡ぎ出す別個の世界を鑑賞するための指針と言える——ことを強調したい。

注

- 一 「風葉和歌集」の詞書（—詞書の役割—）『甲南国文』第四十号 平成六年三月。引用も前号と同じ。
- 二 大槻修先生「あさちが露の研究」 昭和四十九年五月（桜楓社）に詳しい。
- 三 小木喬氏「いはでしのお物語—本文と研究」 昭和五十二年四月（笠間書院）参照。
- 四 〈注二〉参照。
- 五 拙稿「風葉和歌集」の構造—撰集過程についての一試論—『中古文学』第五十四号（平成六年十一月刊行）参照。